㊍ やったあ！　乗れるかな

平成 4 年 4 月 1 日，小学校に新しい教科・生活科が誕生しました。これに先立って昭和 63 年度には奈良県小学校教科等研究会生活科部会をスタートさせ，新しい教科への移行についての研究を進めていましたから，奈良県の取り組みは早いほうであったと思います。

子どもたちの活動を重視する新しい教科・生活科では，子どもたちの元気な歓声が聞かれるといった声がありました。「やったあ」なんて声が聞こえるというのです。これは教師としての大きな喜びです。会報「奈良県の生活科」に，次のような記事を書いたのは，会長として，新しい教科の創造と定着に力を注いでいたときでした。

○「やったあ！」「乗れるかな？」（奈良県の生活科・第 2 号）

発泡スチロールの空き箱をつないだ船を作りあげ，いよいよ浮かべようということになった日，プールのまわりには子どもたちの歓声がわきあがります。

「苗を植えるときには，どんなことに気をつけたらいいのですか」

「これはどんなにして作ったのですか」

これは，子どもたちが「畑の先生」「じいちゃん先生」「ばあちゃん先生」などと，親しみと尊敬の念をこめて呼んでいる学校の近くの人たちとともに活動する中での語りかけです。

「ぼく，上手に切れるようになったよ」

「わたしはアイロンかけができるわよ」

生活科や社会・理科の学習の中でのさまざまな活動や遊びを通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考え，生活上必要な習慣や技能を身につけてきているようです。また，こうした中で，友達とかかわりあい，共に成長し，

子どもたち自身が生きていく力を自分のものにしてきています。

けれども，こうした活発な活動を誘発するためには，生活科の目標や内容を理解し，学校や地域の環境とともに児童の実態を的確に把握して，学習の場を構成することが大切です。こうした綿密な企画の上に子どもたちの活動が広がります。

今年も県内各地の学校で，数多くの実践が行われました。そして，校内研修や郡市の生活科研究部会で報告され，みんなのものになってきています。新しい実践には苦心がありますが，創造には大きな喜びも伴います。

共に考え，互いに情報を交換しあって，自分の学校・〇〇小学校の生活科教育を創り出し，育てていきたいものだと思います。

〇「本物で，本物を」（奈良県の生活科・第 4 号）

「コン，コン，コン」

「トン，トン，トン」

とリズミカルな音が聞こえてきます。

子どもの前にあるのは分厚い板です。そして，左手に持っているのは太く長い釘です。朝の光に照らされてピカピカと美しく光っています。右手に持った金槌は，ほんものの金槌です。この金槌の柄には汗がにじんでできたものでしょうか，黒っぽい「しみ」があり，全体が美しい茶色に染まっています。十分に使いこまれた様子が伺える部分です。黒くにぶい色をした金属の部分は，この金槌がほんものであり，長い間，物を作ることに関わってきたものであることを示しています。これは，もう 10 年以上も前に参観したG幼稚園での子どもの活動の姿です。

ところで，私たち大人の考えの中に，

「子どもだから，おもちゃでよい」

「子どものことだから，少々不具合のものでもいいだろう」
といった考え方はないでしょうか。
でも，
「大人と同じものを使わせてやりたい」
「子どもだからこそ，ほんものを手渡してあげたい」
そんなふうに思うのです。

このようなほんものでの教育は，ほんとうに生活と関わった学習をすすめることになり，ほんものを学ばせることにもつながっていくことでしょう。

そして，「具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち……」という生活科の目標の達成を目指したいと思います。

……

こうして，奈良県の生活科はスタートしました。しかし，新しい教科の設置には反対もありました。
「理科担当指導主事が理科をつぶすようなことをしてどうするんだ」というお叱りも受けました。私は，これが理科つぶしであるとは思いません。自分と自分を取り巻くすべてを一体的に見る小学校低学年の子どもたちに真の自然の姿を見つめさせ，それに関わらせるためにも，こうした教科の取り組みが必要だと思います。それが中学年以降に学ぶ理科の原動力になっていくのだと考えました。こんな生活科の黎明期のことを書いているのが，平成 4 年 11 月 19 日，吉野小学校を会場に開催した研究大会誌の序文です。

……

「石の上にも 3 年」と言いますが，私たちの生活科部会が設立されてから 3 年の月日が過ぎました。「歴史をひもとく」というほどの長

さではありませんが，この機会に生活科の足跡を振り返ってみたいと思います。

「奈良県小学校教科等研究会に生活科部会を置く。その準備を進めるように」と決定されたのは平成元年のことでした。早速，県や各市町村の教育委員会に援助をお願いし，各郡市での組織づくりを呼びかけました。平成元年 8 月には，各郡市の代表者会を開き部会設立の準備を始めました。数回の準備委員会で規約や事業計画などを検討し，設立総会を開いたのは平成元年度も終わりに近い 3 月 1 日でした。

この日の会場となった春日野荘には，予想を大きく超える会員が集まり，規約や予算案が承認されました。そして，県教育委員会学校教育課指導主事のＫ先生から生活科の趣旨やこれからの移行措置についての説明を受け，M先生の「生活科の趣旨を踏まえた社会科の実践報告」を聞きました。この日が本県における生活科教育研究の第 1 歩ということになります。

そして，今日，私たちは第 4 回の研究大会を開催することができました。この大会のために，お力添えをいただきました県及び吉野町の教育委員会，会場を引き受け授業を公開していただきました吉野小学校，また，共にお取り組みいただきました吉野郡生活科研究会，そして研究の成果を発表いただく研究委員の皆様にお礼を申し上げます。

なお，今年は全国小学校生活科教育研究大会も開かれます。今度は私たちの 1 歩を全国にも広げるとともに，明るい笑顔あふれる学校をつくり，生活科の学習を通して 21 世紀の社会に生きる子どもたちにとって欠くことのできない「自ら学ぶ力」を育てていきたいと思います。

……

この年の秋，東京で第 1 回の全国小学校生活科教育研究大会が開催

され，奈良県からも 2 つの研究発表を行いました。また，大会実行委員会からの要請を受けて，司会者などの役員を派遣しました。私も東京都の生活科担当の指導主事とともに，指導助言の役を受け持ちました。後発の教科としては，具体的な実践を持たない私たちのような者が指導助言にあたるのもやむを得ないことだったのです。

県教育委員会から委嘱を受けた小学校指導計画の手引（生活科）作成委員の仕事もありました。もちろん，学校教育課の指導主事や小学校で低学年を担当している先生が中心になってくれましたから，私の仕事は，委員の論議から基本的な考え方を整理すること，各委員が執筆した内容の整合性を検討することが中心でした。

教育放送課からは生活科教育放送番組制作委員としての仕事の依頼がありました。生活科学習指導のポイントの第 1 番目に「直接体験を重視すること」をあげていた私は，安易にテレビを視聴し，「テレビで見たからいいでしょ」となってしまっては大変だと思いました。しかし，子どもが活動を始めるときには何かそのきっかけとなるものがあるはずです。それは，学校の行き帰りに見聞きしたことかもしれません。お年寄りに聞いた話かもしれません。そうしたきっかけに，教育的な意図をもって制作された番組が使われてもいいのではないか，そんなふうに思いました。そして，1 年生番組「みっけちゃんといっしょ」，2 年生番組「わくわくどきどきせいかつか」がスタートしました。

あれから 10 数年が過ぎました。今一度，子どもたちと自然とのかかわりを評価し，生活科の取り組みを理科の実践につなぎ，発見の喜び，創造の楽しさを味わい，科学的なものの考え方が身につく生活科や理科の時間にしていきたいものだと思います。

㊐ 夢，それは先生になること

夢，それは学校の先生になることでした。いつのころからこんな夢を持ったのか分かりません。でも，昭和 17 年に入学し 2 年間を過ごした奈良市佐保国民学校の運動場で行われた教生先生の着任式で「先生になるのはいいけれど，こんなに大勢の人の前でお話するなんて恥ずかしいからやめておこうか」と考えたことを覚えていますから，当時すでにこの夢を持っていたことになります。

入学の前年まで，この学校に勤めていた父が担任していた高等科女子クラスの生徒がいましたから，こんなお姉ちゃんたちにちやほやされ「大きくなったら竹中先生みたいになるの？」と言われたりして，「そうか。先生になるのか」などと考えていたのかもしれません。

その父は著書「あしあと」に私のことを次のように述べています。「長男良行は昭和十一年二月二十六日、あの二・二六事件当日といういわくつきの誕生で、生まれた時からやや弱々しい子であった。幼時は父母とも若く健康で、物珍しさからよくあり勝ちな、思うまま、かゆい所に手の届く様な育て方をした様に思う。生長してからはきょうだいも多く、相変らずの生活の中で長男としての重荷もあり、少年時代から相当苦しみを味わったことと思うが、幼時はまず恵まれていたと言えるだろう。玩具なども十分に与えられのびのびと育っていた。しかし持って生まれた性格か、実におとなしいむしろ弱気な子で、手がかからず親は確かに楽であったが覇気がなく、その点では少々心配であった。また足弱でこれも一つの頭痛の種であった」

こんな心配をかけていた私に訪れた転換期が 3 年生になったときの父の転勤でした。新しい学校は，現在のＪＲや近鉄天理駅から 8 ㎞の山の中にある 22 戸の村を校区とする丹波市第四国民学校藤井分教場

でした。村の中央にあるこの学校は神社やお寺と同居し，神社や寺の境内を兼ねている運動場には鳥居や灯籠が立っていました。（この学校のことは「い：1年生は1人だけ」に書いています）

ここでは狭い運動場のかわりに学校を取り巻く山々が遊び場でした。儀式などの行事の度に行く本校までは4㎞ありました。最寄りのバス停・横川までも4㎞，しかし，回数が少なく坂道になると降りて歩き，あるいは押さなければならない木炭バスに乗ることはほとんどありませんでした。配給米の受け取りには町まで8㎞を近所で借りた大八車で出かけました。帰り道8㎞は登り坂ばかりで一生懸命に引っぱりました。こんな生活が私をすっかり健康にしてくれました。

周りは農家ばかり，ほかの仕事をしているのは，学校に勤務する父だけでした。そんな中で，大人になったら先生になるという目標が次第に明確になっていったように思います。

戦後，私たちは国中(くんなか)と呼ばれる平野部に下りました。しかし，違法なヤミ物資で生活することを選ばず餓死された裁判官のことが報道されたりする時代の生活は厳しいものでした。父が勤務する中学校には占領軍によって禁止された柔道の畳がありました。これを借りて来て敷いた倉庫の一室が私たち一家の住まいになりました。借りた石ころだらけの空き地が食糧を得る手だてになりました。父母と私，妹と2人の弟，6人は力を合わせて戦後の日々を生き延びるために一生懸命でした。乏しい配給米に父が日曜日返上で育ててくれたサツマイモや野菜，父の勤務先のＮ校長先生が飼っておられた山羊の乳，田んぼでとったタニシなどが私たちの貴重な栄養源でした。こうした中で，父が大切にしていた音楽の書籍や同じく音楽教師であった伯父（終戦直前に逝去）から引き継いだ大量の楽譜を古書店に運びました。これはすぐに食糧に変わっていきました。「伯父の大切にしていたピ

アノやオルガン，電蓄などを寄贈しないでおけばもっとたくさんのお米になったのに」これは，物の価値に目覚めた私の不満でした。

昭和 24 年 4 月，5 つの中学校が統合し，添上郡平和村外 4 か町村学校組合立都南中学校という長い長い名前の学校が開校し，私はこの学校の 2 年生になりました。3 学年 15 クラスのこの学校には教室が 5 つしかなく，変則的な授業が行われていました。月曜日の午前は 1 年生，午後は 2 年生，火曜日の午前は 3 年生，午後が 1 年生というサイクルを繰り返すのです。5 つの中学校が集まっただけ，校舎は未完成，荒れた校地の中で生徒の心も荒んでいました。卒業式のあとには傷ついた校舎が残っていました。そして，迎えた 4 月，私は 3 年生になりました。初代Ｔ校長は退職され，M教頭は小学校長に，父と同年代の先生の多くが転出・退職され，残った父には教頭という職が与えられました。入学式には，未着任であった校長の代理者としての父の式辞を聞きました。統合してまだ1年，旧知の先生の多くが学校を去られ，生徒数は 750 を越すという大規模中学校，宿直でもないのに帰宅しない日があり，帰宅すれば遅くまでローソク送電（超低圧の送電）で灯る薄暗い電球のもとで仕事をしていた父，どんなにか苦労が多かったことと思います。こんな生活の中でしたが，私の「先生になりたい」という夢は一層強くなっていました。学校で一番小さかった私ですが，自分が学ぼうとする気持ちは人に負けない大きさがありました。

昭和 26 年 3 月，私はこの中学校を卒業しました。父の発案による新しい形の卒業式でした。卒業生は，学級での仕事のすべてを終え，下靴のまま式場に入ります。閉式とともにそのまま学校を出て，国道に並ぶ先生方や在校生に送られ帰宅の途につくのです。卒業式は無事に終わりました。

高校は学区制で郡山高校と決められていました。普通科だけでも 10

クラス，それぞれ 50 数名でした。私は 1 年 5 組，それは進学・就職の折衷コースでした。当時はとても進学なんていえる状況ではなかったのです。日本育英会から月額 500 円の奨学金を受け，学校の購買部で働くことで月額 500 円（パン 1 個が 16 円，1 日の売り上げが 20000 円にもなるときのことです）の給与をもらい，育友会費等の免除を受けての進学でした。薄いブルーの表紙の教科書を持った進学コースの友人から「お前らの英語の教科書易してええのう」と赤と黄色に塗り分けられた派手な教科書を冷やかされ，その易しい英語さえしっかり頭に入れようとしなくなった私でした。そんな私を厳しくしかり，優しく励ましてくださったのは担任のＹ，Ｕ，Ｉの 3 人の先生でした。

2 年生のとき，10 月の人事異動で父は月ヶ瀬小学校長になりました。ここからの通学には往復 6 時間が必要でした。私は父の親友Ｓ先生のお宅に下宿させてもらい高校に通うことになりました。先生ご夫妻，1 人っ子の「兄ちゃん」，祖父母に可愛がられての生活でした。

帰省の度の楽しみは，父の学校づくりを見に行くことでした。古い木造校舎の改築は望めないことのようでしたが，次のような夢を 1 つずつ実現していく父の顔は輝いていました。

1　薄暗い本館の採光設備を整え，宿直室を新設する。
2　放送設備を改善し，図書室兼映写室を新設する。
3　大きな用水槽を建設し，飲料水を確保する。
4　教具教材を充実し，教科学習のための教室を作る。
5　学校新聞を発行する。

学校新聞「かおり」は，Ｂ3 判 2 つ折り 4 ページで父の特技である孔版技術を駆使したものでした。学校のニュースや児童の作品とともに，父の考えが掲載されていました。次ページの「人間雑感」もその 1 つで，父の教育に対する思いが盛り込まれているように思います。

1級だ2級だ仮免だ。先生の資格もいやにむつかしくなってきた。しかし教育者たる資格、ことに義務教育に於ては学歴より人である。人格である。子供を真に愛する。即ち全身全霊を打ち込んでより高い所に導く、この意気こそ教育者第一の資格ではなかろうか。

学歴なくとも知識は努力によって補える。認定講習をさぼり未だに上進できぬ者の負け惜しみと解されても致し方ないが、確かに現在の教育界は心の人、熱の人を要求していると思う。世事にも長けることはなるほど必要なことには違いなかろうが、世事にうとくとも、ただ黙々として理屈抜きに子供と学び遊び導く。これこそ真の教育者の姿ではなかろうか。

信念というものほど尊いものはない。信ずるところに向かって直進する姿ほど美しいものはない。但しその信念が誤りであったり、方向が偏していたりしてはならない。真直でなければならない。あまりにも周囲を眺め、気にし、方角を誤ってはならない。

次に常に冷静でなければならない。興奮は興奮を呼び、本道を忘れて横道にそれるおそれがある。

次によく動かなければならぬ。骨惜しみしてはならない。困難なこと、人のいやがることに喜んでとび込んで行く勇気がなければならぬ。口で理屈を言い、手をポケットに入れ何事も傍観しているものは語るに足らぬ。常に冷静沈着であり、信ずるところに向かい骨惜しみせずに進んでいく。平凡であるが、私はこんな人間になりたいと思う。

……

こんな文に触発された私は，「大学に行ってもいいよ。できるだけのことはするから」との父の声に，勇んで奈良学芸大学を受験，就職コースからは珍しく中高教員養成課程理科に合格しました。それは，小さいころからの夢，教師になることを実現する第1歩でした。

よ　世の中，学校だけじゃないよ

通知簿，通知票，あゆみ，あしあと，などといろいろな名前のものがありますが，子どもたちの学習状況を保護者にお知らせするものはたいていの学校にあります。そして，ここに記載された内容によって喜怒哀楽さまざまな状況が生まれます。それは昔も今も同じです。

小学校教員としての生活を始めた年，授業もさることながら，学習成績を評価し評定することは非常に緊張する仕事でした。国語にしても，1か月の学習についての評価をする月末テスト，単元ごとの単元テスト，小テスト，学校行事として隔週に行われていた漢字テスト，ノートの点検，作文・感想文の記録，読みのテストなど，いろいろな種類の評価データを集計し，それをもとに5段階で評定する仕事がありました。それぞれの内容などによって重みをつけて計算しました。電卓なんてまだなかった時代，その主役はそろばんでした。欠席した日のテストは多分このくらいはとれるだろうという見込み点をつけて集計し，小さな紙切れに書き成績順に並べて5，4，3，2，1に評定しました。厳密な相対評価ではありませんでしたが，あらかじめ定められていた比率は，学年や学級によって，あるいは担任の個人差によって生じる偏りを小さくすることに役立っていました。

あるとき，こんなことをしてみました。大きく引き伸ばしたクラスの写真を前に，1人1人の子ども思い浮かべ，平素の学習状況を思い起こし，この子は3，この子は4，というようにつけてみたのです。

その後，いつもと同じように複雑な計算をして，「4だろうか，3だろうか」と思い悩みながら評定しました。33人のクラスで両方の成績を並べてみました。食い違いはたった1人でした。あとは見事に一致していたのです。こうなると，食い違いの「4」と「3」が問題です。

どちらが真の評定に近いのでしょう。細かい計算を繰り返した末の評定，子どもたちが授業の折々に現した表情をはじめとする記憶が中心になっている評定，そのどちらが真の値に近いのでしょうか。

朝，登校したときから子どもとの交流が始まり，多いときには 1 日に 6 時間もつきあい，いっしょに給食を食べ，いっしょに掃除し，放課後にも残して指導し，といった毎日が繰り返される小学校では，特別なテストをしなくとも評価できるように思いました。とはいうものの，「じゃあそんな方法にしておこう」という具合にはいきませんでした。やはり，詳細な記録をとり複雑な計算をしていました。

それから 30 年あまり過ぎたある日，学年末の成績処理を終え，ほっと一息ついていた若い先生にこの話をしました。彼からは，

「そうですね。私もだいたいのところはできそうに思います。しかし，保護者に『これはどうして 2 なのですか』と質問されたら困ります。説得できそうにないのです」

という答えが返ってきました。

たしかにそうです。私が，一応の自信を持ちながら，そんな評価方法をとれなかったのもそうでした。

あれから数十年，評価に対する保護者の受け取りようも大きく変化しました。昔は，評価する先生を信頼し，評価された結果を信じていただきました。

「先生がつけられたんだから」

と，私のような若造の仕事でさえ信じていただきました。それが学習の成果を正しく評価されたものと受け止めていただけました。しかし，その一方に

「学校は学校，世の中，それがすべてではないよ。お父さんなんか，この腕 1 本で生きてきたんだ」

という考え方がありました。そして，そんな考え方が広く受け入れられていました。

今は，その逆のように思います。

「ほんとうに，これでいいの。ちゃんと評価されているの。間違っていないの。あの先生を信じていいのかしら」

と評価の信憑性が疑われ，

「学校の成績は大切よ。それであなたの一生が決まるのよ。お父さんのような学校出てたら駄目なのよ」

そんな声が聞こえてきます。

そうした風潮の中で，子どもの姿を全体的に見るやり方は「おおよその見方」「大雑把な見方」として敬遠され，これが何点，これで何点，合計して何点だと計算し，「A君は 268.78，Bさんは 268.63，やはりA君のほうが上だ」というような見方が大手を振って歩いているような気がします。

もちろん，評価は測定の 1 種ですから，可能な限り詳しく正確に行うべきものです。いろいろな実験のときに最小目盛りの 10 分の 1 まで読み取るというやり方を続けてきた理科の教師としては当然のことです。

でも，「木を見て森を見ない」というようなことになっていないでしょうか。そして，「評価する・評定する」という作業に力を取られ，その子どもの全体像を把握し，問題点を見つけ出し，よりよい成長を実現していくという肝心の仕事がなおざりになってはならないと思うのです。